

各関係機関団体の長 } 殿
各病虫害防除員

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

平成30年度病虫害発生予報第6号(9月)について

このことについて、病虫害発生予報第6号を発表したので送付します。

予報第6号

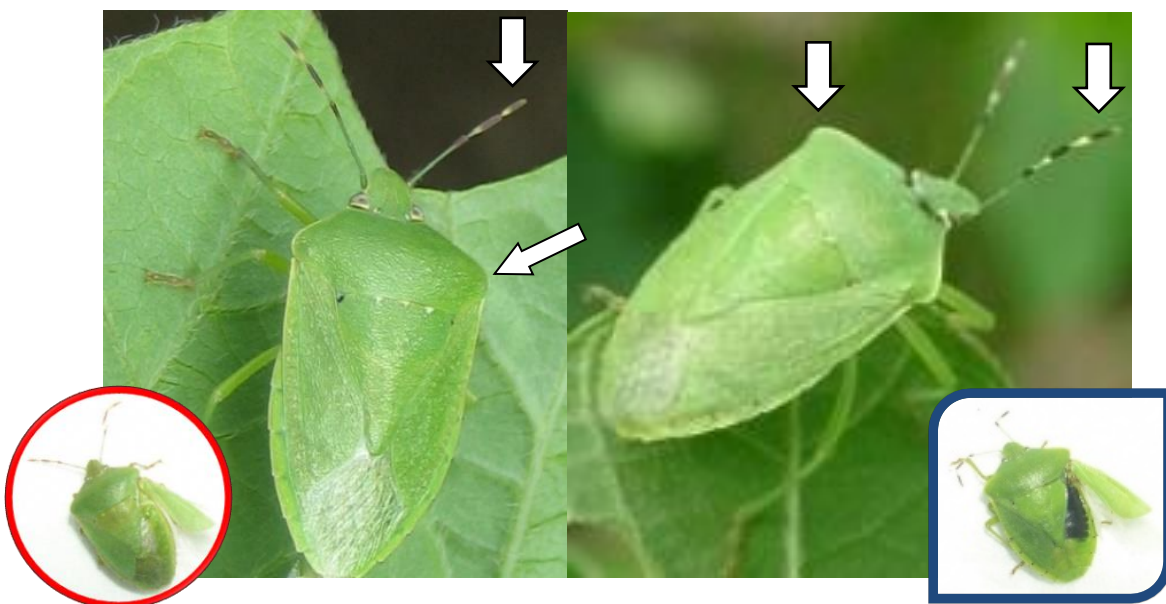
ミナミアオカメムシの発生状況確認と早期防除に努めましょう。

県下5か所の予察灯におけるミナミアオカメムシの5月1半旬～8月5半旬の誘殺虫数は、
平年より多くなっています。

本種は見た目がそっくりな同属 (*Nezara* 属) のアオクサカメムシより暑さを好み、発生世
代数と産卵数が多いため、水稲・大豆・果菜類野菜等の主要害虫になっています。

今後の発生状況の確認と適切な防除指導に努めましょう。

<平成30年8月30日付け病虫害発生予察速報第2号参照>



ミナミアオカメムシ(左)とアオクサカメムシ(右)の成虫

見分け方	触覚先端部	肩の張り	成虫翅下の色
ミナミアオカメムシ	褐色	弱い	緑色
アオクサカメムシ	黒	強い	黒

<予想される向こう1か月の天候(平成30年9月1日～平成30年9月30日)>

気圧の谷や湿った空気の影響を受けるため、向こう1か月の降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ない見込みです。

気温は1週目が高く、2週目は平年並か低くなり、向こう1か月の気温は、ほぼ平年並の見込みです。

向こう1か月の気温・降水量・日照時間（数値は予想される出現確率）

	平均気温	降水量	日照時間
九州北部地方	低30 並40 高30% ほぼ平年並の見込み	少20 並40 多40% 平年並か多い見込み	少40 並40 多20% 平年並か少ない見込み

（福岡管区气象台 平成30年8月30日発表抜粋）

9月における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病害虫名	現況 (発生量)	9月の発生予報 (発生量)	
		平年比	平年比	前年比
水稲	いもち病	少	並	やや多
	紋枯病	少	やや少	並
	トビイロウンカ	少	少	少
	斑点米カメムシ類	並	やや多	やや多
大豆	ハスモンヨトウ	やや少	並	並
	吸実性カメムシ類	やや多	やや多	やや多
カンキツ	黒点病	並	並	やや多
	ミカンハダニ	やや少	やや少	やや多
カキ	炭疽病	やや少	並	やや多
	フジコナカイガラムシ	やや少	やや少	多
果樹共通	チャバネアオカメムシ	やや多 (前年比)	並 (前年比) 果樹園への飛来確認	
茶	炭疽病	少	やや少	並
	カンザワハダニ	やや少	並	並
	チャノコカクモンハマキ	やや少	並	やや多
	チャノミドリヒメヨコバイ	少	やや少	やや少
冬春イチゴ (育苗期)	炭疽病	少	並	少
	ハダニ類	少	やや少	少

注1) 予報の発生量は平年（福岡県の過去10年間）及び参考として前年との比較で、

「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。

注2) 予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。

それぞれの条件は、少発生（－）、やや少発生（－～±）、並発生（±）、やや多発生（±～＋）、多発生（＋）として示し、＋－を総合的に判断して発生量を予想しています。

注3) 果樹共通・チャバネアオカメムシの現況は、年次変動が大きいいため前年比としている。

【普通作物：水稲】

1 いもち病（穂いもち）

(1) 予報の内容

発生量：平年並・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 8月5半月調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。

（葉いもち）発病株率 4.6%（平年 8.5%、前年 1.6%）

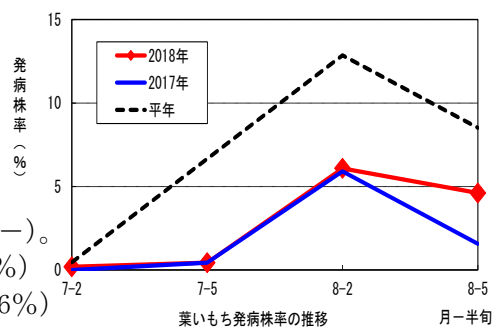
発生ほ場率 28.3%（平年 40.7%、前年 1.6%）

また、5月下旬植えの夢つくしで穂首いもちが確認された。

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 穂いもちに対する薬剤防除を実施する場合、薬剤によって使用時期（収穫前日数）が異なるので使用基準を確認する。



- イ 使用農薬は「平成30年度普通作病害虫・雑草防除の手引き」を参照する。
- ウ 農薬の使用および散布等にあたっては、p13の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。

2 紋枯病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少・前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。

発病株率 0.7%（平年 2.0%、前年 1.2%）

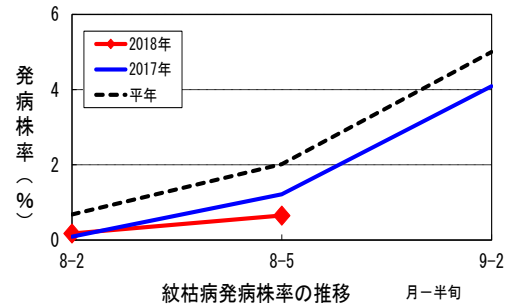
発生ほ場率 15.2%（平年 21.4%、前年 1.2%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 出穂期以降、病斑の上位進展が認められる場合は防除を行う。

イ 農薬によって使用時期（収穫前日数）が異なるので、使用基準を確認する。



3 トビイロウンカ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。

10株当たり払い落とし成幼虫数0頭

（平年 6.5頭、前年 10.8頭）

発生ほ場率 0%（平年 47.0%、前年 77.3%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

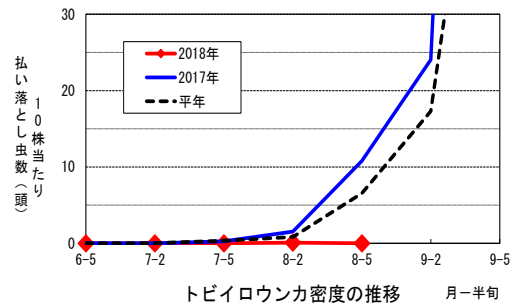
ア 本種は世代を経るごとに急激に増加するので、ほ場での発生状況を必ず確認し、要防除水準を超えたほ場では防除を実施する。

<要防除水準>

飛来後第2世代：100株当たり 100頭以上（9月上旬）

飛来後第3世代：100株当たり 1,000頭以上（9月中旬～10月上旬）

イ 出穂後は薬剤が株元まで到達しにくくなるため、株元に確実に届くよう丁寧に散布する。また、収穫前日数に注意する。



4 斑点米カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

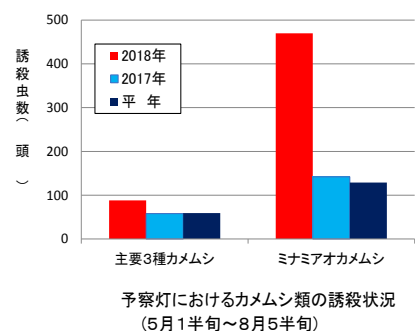
(2) 予報の根拠

ア 県下5か所の予察灯における5月1半旬～8月5半旬の誘殺虫数は、主要3種カメムシは平年よりやや多、ミナミアオカメムシは平年より多、アカスジカスミカメは平年並であった（±）。

- ・主要3種カメムシ<クモリカメムシ、ホリカメムシ、シラホカメムシ>
88頭（平年 59頭、前年 58頭）

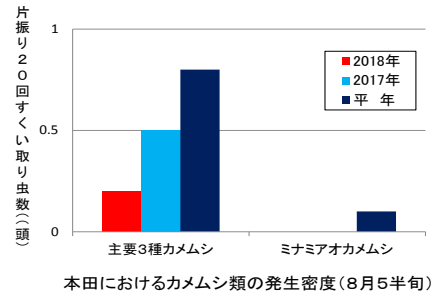
- ・ミナミアオカメムシ
470頭（平年 129頭、前年 142頭）

- ・アカスジカスミカメ
1,477頭（平年 1,537頭、前年 933頭）



イ 8月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（±〜）。

- ・ 主要3種カメムシ（クモリカメムシ、ホリカメムシ、シボカメムシ）
20回すくい取り虫数 0.2頭
(平年 0.8頭、前年 0.5頭)
発生ほ場率 13.0% (平年 22.2%、前年 11.3%)
- ・ ミナミアオカメムシ
20回すくい取り虫数 0頭
(平年 0.1頭、前年 0頭)
発生ほ場率 0% (平年 3.3%、前年 3.8%)
- ・ アカスジカスミカメ
20回すくい取り虫数 0.2頭
(平年 1.0頭、前年 0頭)
発生ほ場率 10.9% (平年 22.2%、前年 0%)



ウ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 発生状況に充分留意し、発生が多い場合は農薬安全使用基準(使用時期、使用回数)を遵守し、薬剤防除を行う。
- イ カメムシ類は広範囲に移動するので、できるだけ広域一斉防除を実施する。

【普通作物：大豆】

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、100株当たりの白変葉株数は平年よりやや少なかった（±〜）。
100株当たりの白変葉株数 0.4株

(平年 1.3株、前年 0.4株)

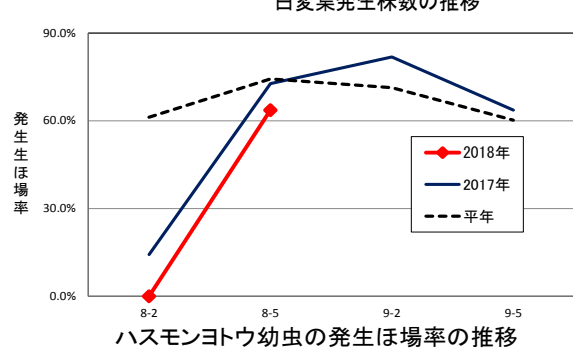
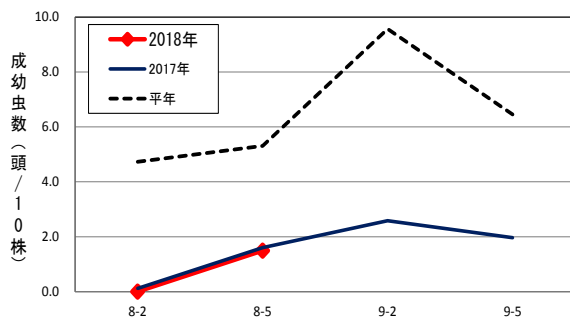
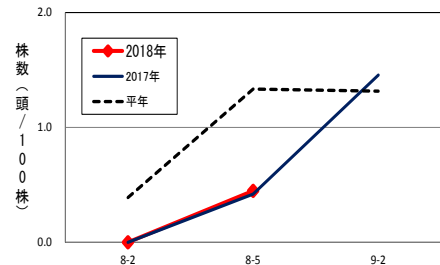
発生ほ場率 54.3% (平年 45.3%、前年 36.4%)

イ 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（-）。

10株当たり幼虫数 1.5頭

(平年 4.7頭、前年 1.6頭)

発生ほ場率 63.6% (平年 74.3%、前年 72.7%)



ウ 8月1半旬～8月5半旬のフェロモントラップにおける誘殺虫数は、平年よりやや少なかった（±〜）。

筑紫野市 339頭 (平年 650頭、前年 334頭)

筑後市 239頭 (H25～H29年の5か年平均1,095頭、前年 781頭)

行橋市 674頭 (H22～H29年の8か年平均 369頭、前年 147頭)

エ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 葉の食害による減収量が大きい時期は開花期前後（8月下旬～9月上旬）である。
- イ この時期に分散前の若齢幼虫が群生している白変葉は、見つけ次第除去するとともに、薬剤防除を実施する。
- ウ 防除適期は、フェロモントラップの誘殺ピークから10日目頃であるが、地域によって誘殺数に差があるため、ほ場で発生状況を必ず確認する。

2 吸実性カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

- ア ミナミアオカメムシの県下5か所の予察灯における5月1半旬～8月5半旬の誘殺虫数は平年より多かった(+)。

470頭（平年 129頭、前年 142頭）

- イ 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

- ・ *Nezara* 属カメムシ<シリアオ・アオカメムシ>
10株当たり虫数 0頭（平年 0.0頭、前年 0頭）
発生ほ場率 0%（平年 1.3%、前年 0%）

- ・ イチモンジカメムシ
10株当たり虫数 0.0頭
（平年 0.1頭、前年 0頭）
発生ほ場率 0.0%（平年 4.0%、前年 0%）

- ・ ホソヘリカメムシ
10株当たり虫数 0.1頭
（平年 0.0頭、前年 0頭）
発生ほ場率 9.1%（平年 3.3%、前年 0%）

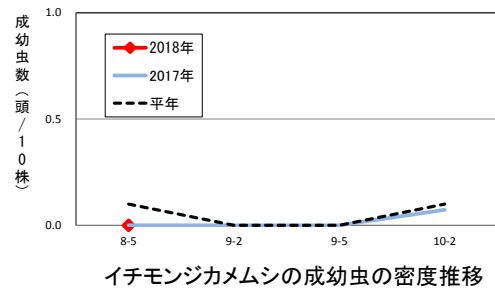
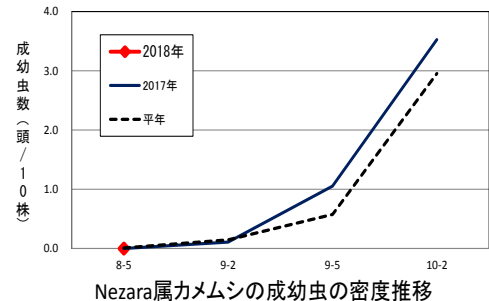
- ウ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 防除適期は9月中～下旬の開花期後30日前後であるが、多発生の場合はその7～10日後に2回目の防除を行う。

- イ カメムシ類は収穫時まで子実被害が続くため、発生初期の防除が重要である。

- ウ カメムシ類は広範囲に移動するので、できるだけ広域一斉防除を実施する。



【果樹：かんきつ】

1 黒点病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

- ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病果率 1.6%（平年 1.9%、前年 1.4%）

発生ほ場率 54.6%（平年 39.7%、前年 45.5%）

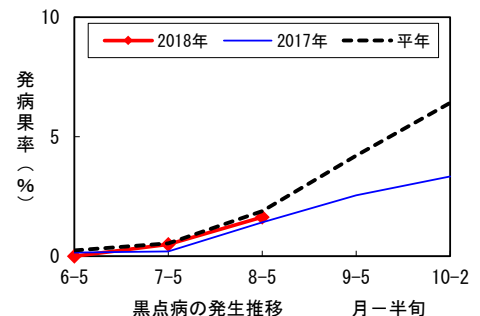
- イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±～+)。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 伝染源である枯れ枝は極力除去し、園外に持ち出し処分する。

- イ 前回防除後の積算降雨量や散布間隔に応じた適期防除を行う。

- ウ 農薬の使用および散布等にあたっては、p13の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。



2 ミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 8月5半月調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

寄生葉率 8.6%（平年 12.7%、前年 5.9%）

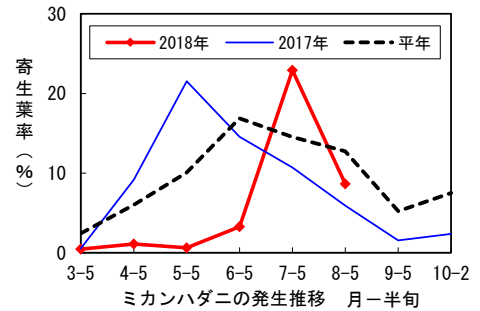
発生ほ場率 63.6%（平年 62.9%、前年 54.6%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤防除にあたっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

イ 薬剤感受性の低下をさけるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【果樹：かき】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 8月5半月調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

発病枝率:0%（平年:0.12%、前年:0.08%）、同左発生ほ場率:0%（平年:5.7%、前年:12.5%）

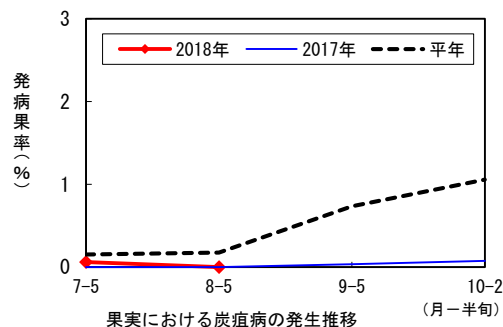
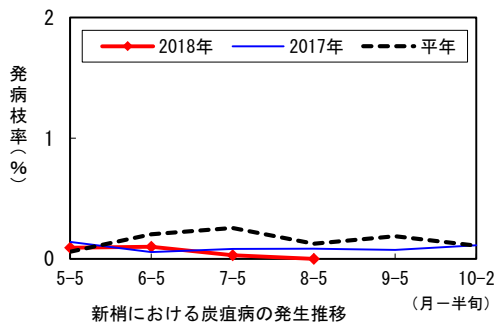
発病果率:0%（平年:0.18%、前年:0%）、同左発生ほ場率:0%（平年:14.2%、前年:0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となる罹病枝や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。

イ 連続降雨があった場合や前年の発生が多かった園では、薬剤防除を徹底する。



2 フジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年より多

(2) 予報の根拠

ア 8月5半月調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

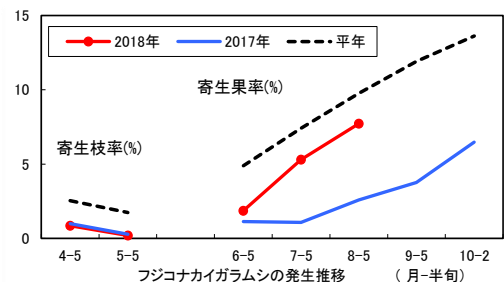
寄生果率 7.7%（平年 9.8%、前年 2.6%）

発生ほ場率 63.6%（平年 88.6%、前年 88.9%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤がかかりにくい部位に寄生しているので、混み合った枝を整理し散布むらがないよう丁寧に散布する。



イ 防除対策の詳細は、県ホームページに掲載している『病害虫・雑草防除の手引き』を参考に
 する。URL : http://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/life/329774_53548519_misc.pdf

【果樹共通：チャバネアオカメムシ】

(1) 予報の内容

発生量：前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月3半旬～4半旬までの予察灯によるチャバネアオカメムシの合計の誘殺数は、前年よりやや多かった(±～+)。

誘殺虫数：593頭(前年 3,401頭、前々年 1,256頭) (調査地点：筑紫野市)

526頭(前年 85頭、前々年 285頭) (調査地点：久留米市)

393頭(前年 93頭、前々年 355頭) (調査地点：八女市)

376頭(前年 73頭、前々年 39頭) (調査地点：朝倉市)

イ 8月3半旬～4半旬までのフェロモントラップでのチャバネアオカメムシの誘殺虫数は、前年並であった(±)。

誘殺虫数：11頭(前年 15頭、前々年 18頭) (調査地点：筑紫野市)

151頭(前年 20頭、前々年 22頭) (調査地点：うきは市)

2頭(前年 0頭、前々年 2頭) (調査地点：宗像市)

8頭(前年 1頭、前々年 2頭) (調査地点：八女市)

ウ 8月5半旬調査のヒノキ球果ビーティングによるチャバネアオカメムシの捕獲虫数は、前年並であった(±)。

捕獲虫数：5.1頭(前年 5.7頭、前々年 7.7頭) (県14か所平均)

エ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 果樹カメムシ類の飛来状況は地域により異なる。また、同一園内でも被害発生状況は偏りがあるため、園内全体を注意して見回り、飛来を認めたら直ちに防除する。

イ 果樹カメムシ類は広範囲に移動するため、薬剤散布は広域一斉防除の効果が高い。

ウ 薬剤防除の際は、収穫前日数等農薬使用基準を遵守する。

エ 降雨があると薬剤の残効が短くなるので、散布間隔に注意する。

オ 今後の発生状況については、病害虫防除所ホームページ病害虫の発生状況(<http://www.jpnpn.ne.jp/fukuoka/doukou/hassei.html>)を参照する。

【果樹：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	9月の発生予報 (発生量)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
かき ハマキムシ類	やや少	やや少	やや少	・ハマキムシ類幼虫は葉と葉が重なった部分や、へたと果実の間に多く潜んでいるため、薬剤はかかりムラがないよう十分量を丁寧に散布する。

【茶】

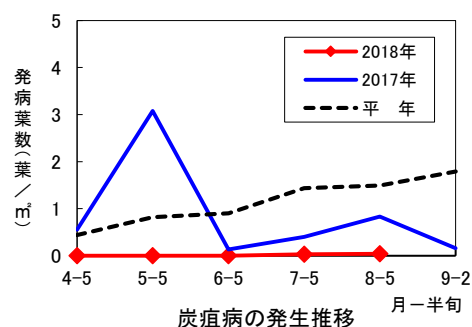
1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(－)。



発病葉数 0.04 葉 (平年 1.5 葉、前年 0.8 葉)

発生ほ場率 13% (平年 34%、前年 30%)

イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている (+)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 秋芽での発生に注意し、萌芽から1葉期と4～5葉期に防除を行う。

イ 雨滴により胞子が飛散伝搬するので、できる限り降雨前日までに防除を実施する。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

エ 農薬の使用および散布等にあたっては、p13の内容を確認の上、適切に実施する(以下の病害虫についても同様)。

2 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-～±)。

寄生葉率 2.0% (平年 4.3%、前年 0.6%)

50葉当たり寄生虫数 1.8頭 (平年 10.6頭、前年 0.4頭)

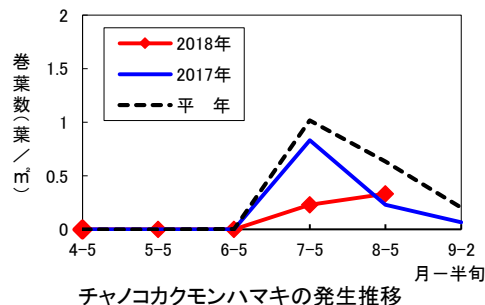
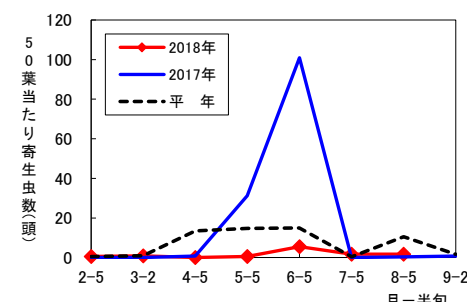
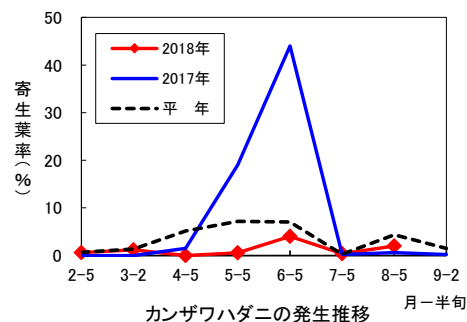
発生ほ場率 25% (平年 33%、前年 10%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±～+)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発生状況をよく観察し、寄生葉率が2%以上の場合は防除を行う。

イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



3 チャノコカクモンハマキ

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-～±)。

1㎡当り葉巻数 0.3枚 (平年 0.6枚、前年 0.2枚)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±～+)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 第3世代成虫の発蛾最盛期は、9月上旬以降と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。

イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。

4 チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

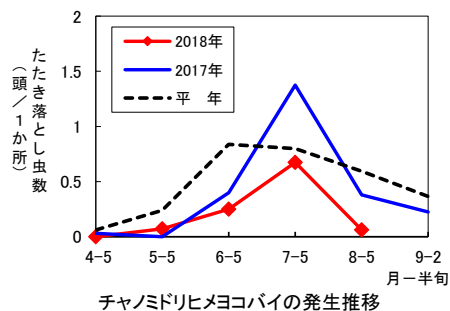
ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

1か所当たりたたき落とし虫数 0.1頭

(平年 0.6頭、前年 0.4頭)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている。

(3) 防除上注意すべき事項



- ア たたき落とし（B5版上）で4頭以上発生している場合は防除を行う。
- イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。
- ウ 多発後は防除効果が劣るので、多発する前に防除を行う。

【茶：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	(現況) 発生量	9月の発生予報 (発生量)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
もち病	並	やや多	やや多	・秋芽生育期に降雨が多いと、感染、発病しやすくなる。 ・今年多発した園では、萌芽から1葉期までに防除を行う。
チャノキイロアザミウマ	少	やや少	並	・たたき落とし（B5版上）で10頭以上発生している場合は防除を行う。 ・新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。
チャノホソガ	少	やや少	並	・ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。 ・巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。
チャトゲコナジラミ	やや少	並	並	・防除適期は若齢幼虫発生期で、第3世代幼虫の防除適期は、9月上旬～中旬と予想される。 ・虫の発生が確認できない園でも、寄生している可能性が高いので防除を行う。 ・幼虫は葉裏に寄生しているため、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

【野菜：冬春イチゴ（育苗期）】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年並・前年より少

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。

発病株（苗）率 0.02%（平年 0.27%、前年 1.37%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ほ場をこまめに見回り、発病株及びその周辺株は速やかに除去・処分し、発病が拡大しないよう努める。

イ 苗の湿度が高いと発病しやすく、雨媒伝染により感染が拡大するため、苗の間隔を空け風通しを良くする。

ウ 窒素肥料を多用すると発病しやすいので、適正な肥培管理に努める。

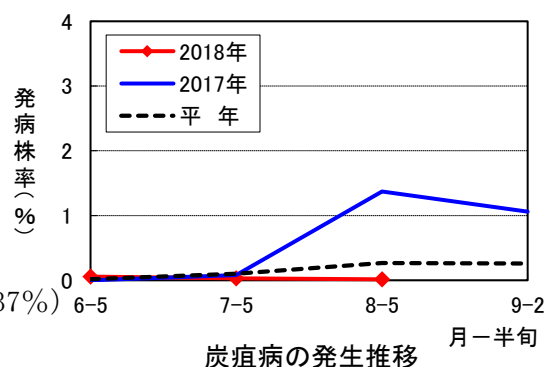
エ 発病後に治療できる薬剤はないことから、葉かき作業直後や降雨前後を含めて定期的な予防散布を徹底する。なお、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

オ 夜冷短日処理や低温暗黒処理は、苗へのストレスがかかり発病を助長するので、入庫前に生育状況を確認し、必ず健全苗を用いる。

カ 入庫する際は、過湿を避けるため、苗を詰めすぎないように注意する。

キ 入庫前および陽光処理時のかん水は、過度にならないように注意する。

ク 農薬の使用及び散布等にあたっては、p13の内容を確認の上、適切に実施する。（以下の病害



虫についても同様)

2 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少・前年より少

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(一)。

寄生株率 5.6% (平年 12.7%、前年 5.7%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。

イ 摘葉した葉はほ場内に放置せず、ビニル袋等に入れて密封し、処分する。

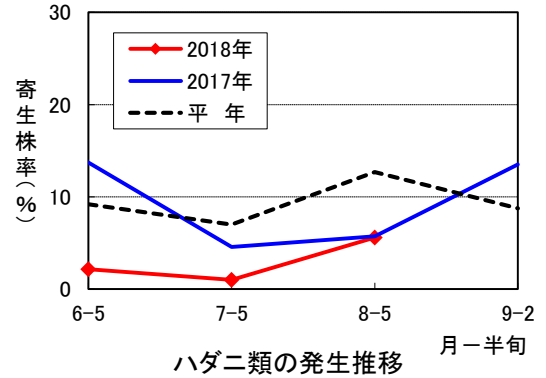
ウ 本ぼへ持ち込まないよう、苗の段階での防除を徹底する。

エ 多発後は防除が困難になるので、発生状況に注意し、発生初期の防除を徹底する。

オ 夜冷短日処理や低温暗黒処理を行う場合は、入庫前に十分防除を行う。

カ 抵抗性がつきやすいので、気門封鎖剤も利用し、同一系統薬剤の連用は避ける。また、葉裏に薬液が十分付着するよう、摘葉後に防除を行う。

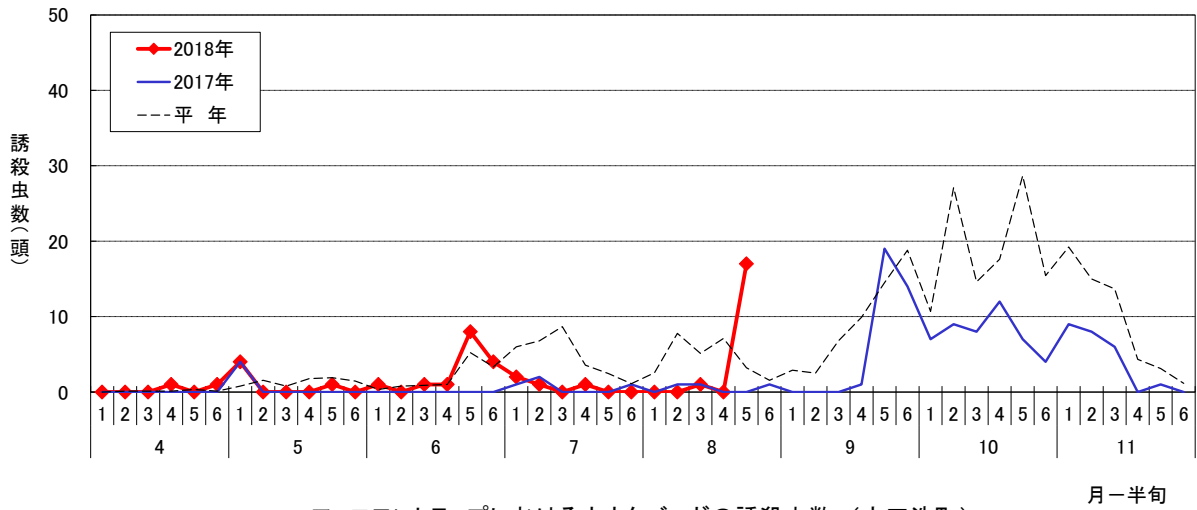
キ 薬剤感受性が低下しているため、天敵を利用した防除を実施する場合は、天敵類への影響が長い有機リン系、カーバメート系、合成ピレスロイド系、ピラゾール系の薬剤は使用しない。



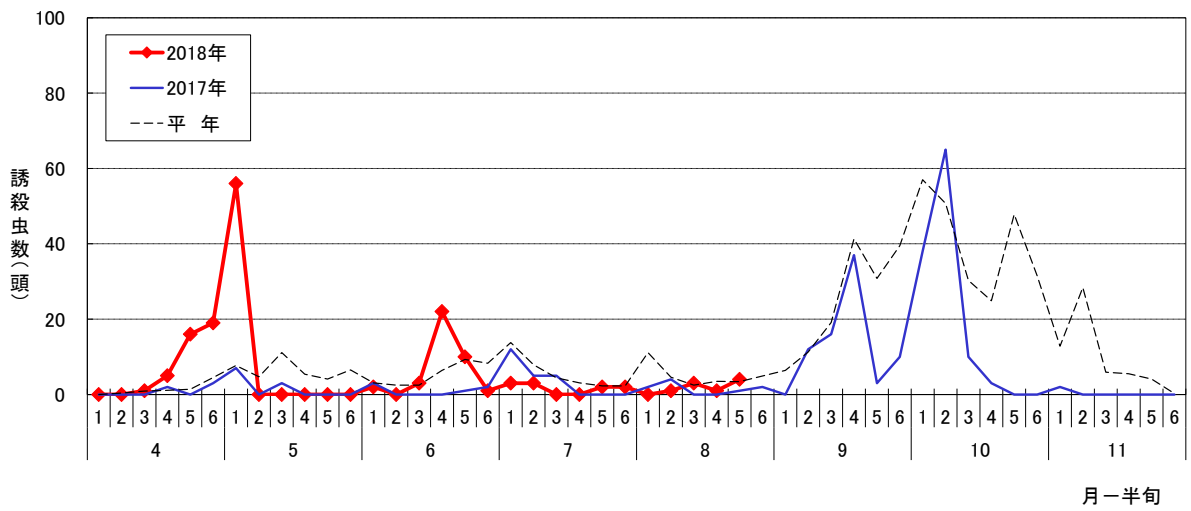
【野菜：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	現況 (発生量)	9月の発生予報 (発生量)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
野菜共通 オオタバコガ	やや少	やや少	やや少	<ul style="list-style-type: none"> ・薬剤防除は、孵化直後の幼虫を対象に実施する。 ・今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページを参照のこと (以下の害虫についても同様)
ハスモンヨトウ	やや少	やや少	やや少	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度は地域によって発生量に差があるため、発生を確認したら直ちに防除を行う。 ・薬剤防除は、孵化直後の幼虫を対象に実施する。
コナジラミ類	— (※)	— (※)	並	<ul style="list-style-type: none"> ・早期発見に努め、初期発生からの薬剤防除を徹底する。 ・施設内への成虫の飛び込みを防止するため、防虫ネットの目合いは0.4mm以下にする。

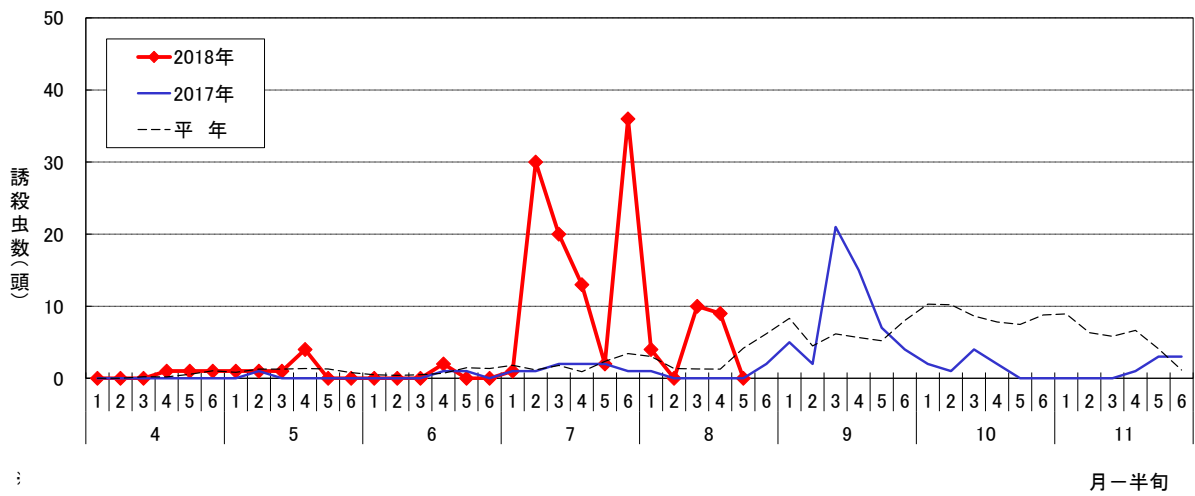
※ コナジラミの発生量は、2015年から実施しているトラップ調査を基にしているため、平年値はなく、現況は前年比。



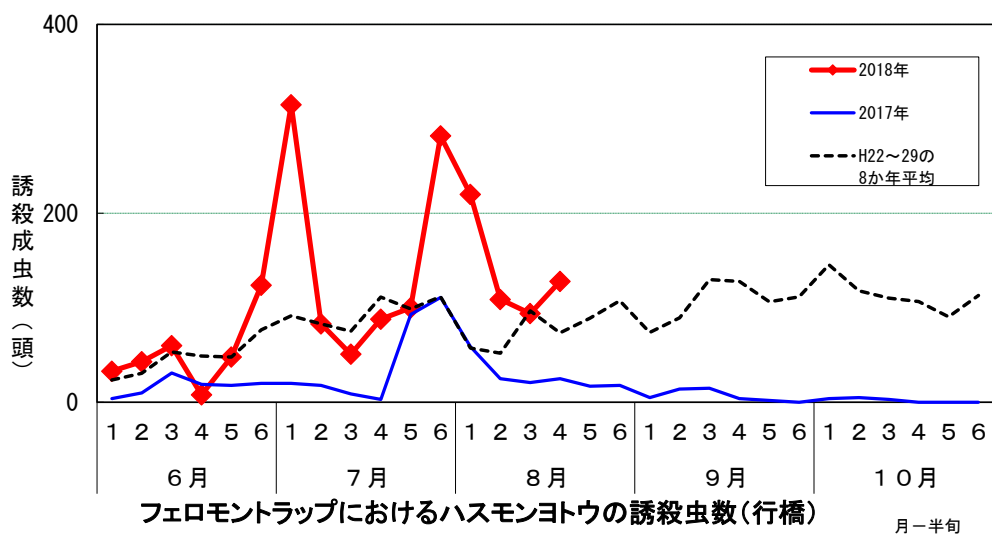
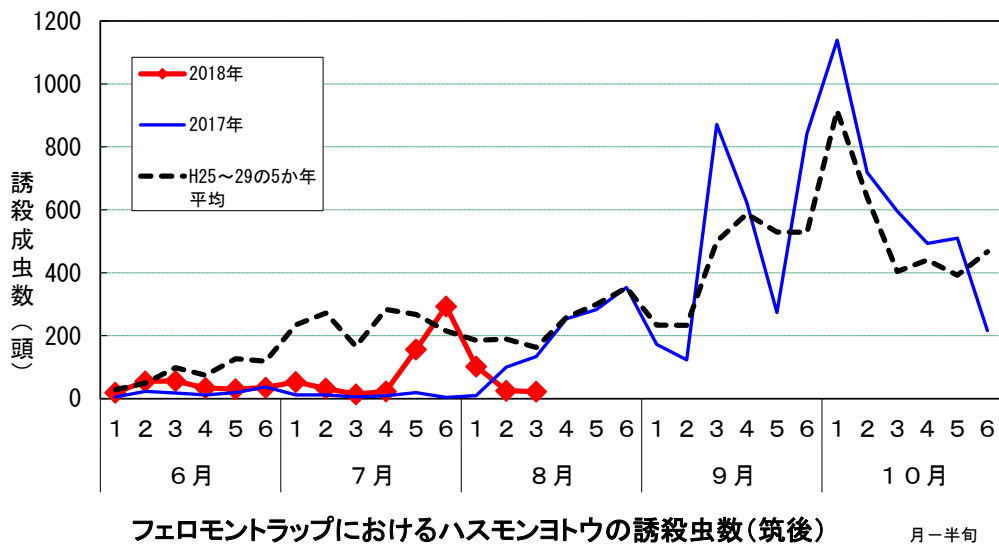
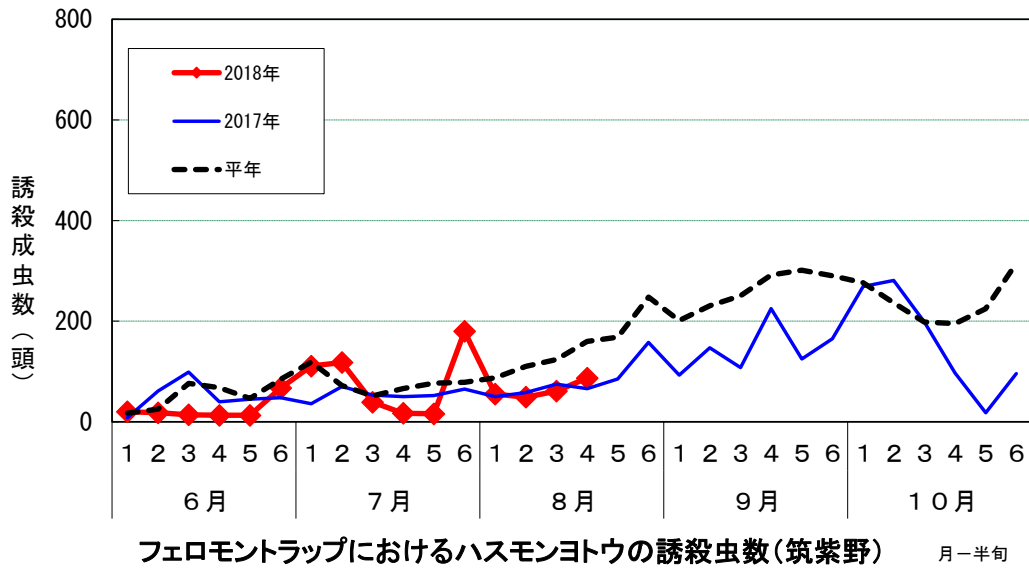
フェロモントラップにおけるオオタバコガの誘殺虫数（大刀洗町）

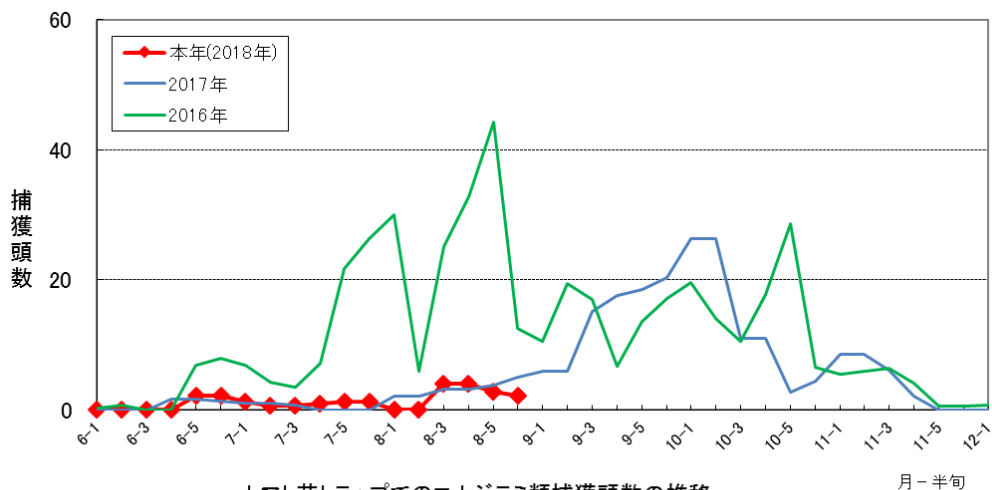


フェロモントラップにおけるオオタバコガの誘殺虫数（みやま市）



フェロモントラップにおけるオオタバコガの誘殺虫数（岡垣町）





トマト苗トラップでのコナジラミ類捕獲頭数の推移
(筑紫野市吉木)

※平成27年(2015年)より調査のため平年値なし

農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、安全使用講習会の開催や啓発チラシの配布等を関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。

使用者の安全はもちろん、人畜・隣接作物・河川等への配慮について、ご指導をお願いします。

1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

(例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる)

○有効期限切れの農薬は使用せずに、産業廃棄物として処分する。

2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフト低減ノズルを使用する。

○散布は場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

3 保護具の着用

○農薬の散布時には、ラベルの注意・警告マークをよく確認し、マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用する。

4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。

5 防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

6 空容器の処分

○空容器は、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。

また、野焼きは法令で禁止されているので行わない。

福岡県病害虫防除所ではQRコードを作成しています。
携帯電話のQRコードリーダーでスキャンして頂くと、病害虫防除所ホームページに簡単にアクセスできますので、御利用下さい。



最新の病害虫発生状況